

現代日本語における接尾辞「がる」の意味・用法

韓 金柱
東京外国語大学大学院地域文化研究科大学院生
hanjinzhu@yahoo.co.jp

1. はじめに

本稿は、現代日本語における接尾辞「がる」の意味・用法について再考することを目的とする。分析の対象とするのは、以下の(1)～(3)に示すような「感情形容詞+がる」である。(以下、分析の対象となる「がる」に下線を付して示す。)

- (1) 彼女は机を叩いて、悔しがった。
- (2) 彼女は顔には出さなかったが、心の中では悔しがっていた。
- (3) 彼女は表面上机を叩いて悔しがったが、心の中では喜んでいた。

2. 先行研究の記述の検討

先行研究において、接尾辞「がる」の意味・用法は、以下のように記述されている。

西尾 (1972)	人が形容詞の表している内的な気持ちや状態にあることを、外的な態度・言動などに示すことを意味する
森田 (1988)	A グループ【-表出、+切実性 ¹ 、-誇示】(感情・感覚形容詞) B グループ【+表出、+切実性、-誇示】(感情・感覚形容詞、属性形容詞) C グループ【+表出、-切実性、+誇示】(属性形容詞)
富田 (1997)	第三人称の人物が、そのように思っている・感じている、あるいは、そのような様子であるということを表している
黄 (2004)	基本的に言語主体が観察者の立場に立ち、文脈に登場した人物の内的状態を把握して、それを言語表現する 一人称の場合：①自分自身が以前に抱いた感情・感覚をとらえ、それを客体的にながめる ②相手が存在する(三人称の感情・感覚をあらわすのは、「-がる」の機能の一つの具現に過ぎない)
王 (2005)	感情主の行動や意志を中心に描写する機能を果たす
市川 (2005)	客観性が強いので、話し手自身が主語に立つことはない

しかしながら、以上のような接尾辞「がる」の意味・用法についての記述は、以下の各点において十分でないと考えられる。

¹ ここで「切実性」とは、「主語に当たる人物が心からそうであると思う、感じる」ことであるとされている。

まず、以下の例 (4) に見られるように、「～がる」という表現が用いられる時、主語に当たる人物が必ずしも内的にその形容詞で表される気持ちや状態にあるとは限らない。

(4) 彼女は人の同情を引くために、わざと苦しがった。

また、「～がる」という表現が用いられる時、以下の例 (5) に見られるように、主語にあたる人物の「内的状態」と「外に表れた様子」は必ずしも一致するとは限らない。

(5) 彼女は口にはしなかったが、心の中では悲しがっていた。

また、以下の (6) (7) に見られるように、「～がる」という表現が一人称で用いられる時、必ずしも、黄 (2004) が述べるように、自分自身の「以前」に抱いた感情・感覚を捉えて、それを客体的にながめているとは限らない。

(6) 私は「いいなあ」と心の中で彼女のことをうらやましがっています。

(7) ここで諦めたら、何年後かに私は成功した人をうらましがるに違いない。

3. 対象となる人物が示している「外的な様子」とその「内面」との関係づけ

本稿では、先行研究で言われているように、接尾辞「がる」が、対象となる人物が「その形容詞で表される内的な気持ちや状態にある」ことを表すものとは考えない。ここでは、「がる」が用いられる際の「話者の捉え方²」を重視し、「対象となる人物が示している外的な様子³」と「対象となる人物の内面」および「総合的な知識⁴」という観点から、接尾辞「がる」の意味を「話者が、対象となる人物が示している外的な様子を、総合的な知識に基づいてその内面と関係付け、それが、対象となる人物の内面の感情の表れであると捉えていることを表す」ものであると考える。具体的には、以下のような3つの用法を観察することができる。(以下、対象となる人物が示している外的な様子に、 を付す。)

3.1 対象となる人物が当該の形容詞で表される感情を内面に持っている場合 (1) : 対象となる人物の内面とその人物が示している外的な様子とが一致する

(8) 彼女は机を叩いて、悔しがった。

(8) の場合、対象となる人物「彼女」が示している様子「机を叩く」は、一般的に人が「悔しい」気持ちである際に示す様子的一种であると認められるものである。ただし、この場合、対象となる人物「彼女」が示している動作「机を叩く」は、あくまで話者が捉えた対象となる人物「彼女」の様子であり、その「彼女」が本当に「悔しい」という感情を持っていて、それを示した動作である

² ここでの話者の捉え方とは、話者が対象となる人物に関する総合的な知識に基づいて、その人物の現在の様子とその人物の内面とをどのように関係付けて捉えるかということである。

³ ここでの外的な様子とは、対象となる人物が発した言葉、示した態度、動作、動き、表情などのことを指す。

⁴ ここでの総合的な知識とは、人がある感情を抱いている際に、見せる表情や態度、行動などに関する一般的な知識と話者の頭の中に蓄積されている対象となる人物に関する知識（その人物の普段の振る舞いまたは、その人物の背景など）との両方を含めたものである。

という保証はない。つまり、ここでの「悔しがる」という表現は、話者が、対象となる人物「彼女」が示している外的な様子を、一般的な知識に基づいて「そのまま」彼女の内面に関係付けて、その動作は、彼女の「悔しい」気持ちの表出であるだろうと捉えたことを表していると考えられる。この時、話者は対象となる人物「彼女」の内面とその「彼女」が示している外的な様子とが「一致する」ものと捉えていると思われる。

3.2 対象となる人物が当該の形容詞で表される感情を内面に持っている場合（2）： 対象となる人物の内面とその人物が示した外的な様子とが一致しない

(9) 彼女は顔には出さなかったが、心の中では悔しがっていた。

(9) の場合、対象となる人物「彼女」が示した態度「顔には出さなかった」は、一般的に人が「悔しい」気持ちである際にそれが外的にそのまま表れた様子であるとは考えられない。話者は、対象となる人物「彼女」が示しているこの外的な様子を、頭の中に形成されている対象となる人物に関する知識（例えば、普段の彼女は我慢強く、「悔しい」時や「つらい」時いつも表面に表さないで、堪えていたということを知っているなど）を根拠として、彼女の内面に関係付けていると思われる。つまり、話者は、彼女の「内面」に隠されたもう一人の「彼女」を見ており、その外的様子については、やはり「悔しい」気持ちを表しているとして捉え、「～がる」という表現を用いていると思われる。この場合、対象となる人物が当該の形容詞で表される感情を内面に持っているという点では、3.1と同様である。ただし、ここでは、話者が、対象となる人物「彼女」の内面とその「彼女」が示している外的な様子とは「一致しない」と捉えていると考えられる。

3.3 対象となる人物が当該の形容詞で表される感情を内面に持っていない場合： 対象となる人物の内面とその人物が示した外的な様子とが一致しない

(10) 彼女は表面上机を叩いて悔しがったが、心の中では喜んでいた。

(10) の場合、3.1と同様対象となる人物「彼女」が示している様子「机を叩く」は、一般的に人が「悔しい」気持ちである際に示す様子的一种であると考えられる。ただし、この場合の対象となる人物「彼女」が示した動作「机を叩く」は、むしろ「そのようなふりをした」ことを示すものであり、その「彼女」が内的に本当に「悔しい」気持ちや状態にあるわけではない。つまり、この場合の「悔しがる」という表現は、話者が、対象となる人物「彼女」が示している動作を、頭の中に形成されている対象となる人物に関する知識（例えば、何か目論見があって、彼女がそのような態度を示しているということを知っているなど）に基づき、その人物の内面に関係付けて、その動作は、彼女の「悔しいふりをしたい」という内面の感情の表れであるだろうと捉えたことを表していると考えられる。この時、話者は対象となる人物「彼女」の内面とその「彼女」が示している外的な様子とは「一致しない」と捉えていると考えられる。

4. まとめ

本稿では、現代日本語における接尾辞「がる」の意味・用法を分析した。「XがAがる」は「話者が、対象となる人物Xが示している外的な様子を、総合的な知識を根拠とし、その人物の内面と関係付けて、それが、対象となる人物の『Aである』または『Aであるふりをしたい』という内面の表出であると捉えていることを表す」ものであると考えた。このような、話者の捉え方を図で示すと以下ようになる。

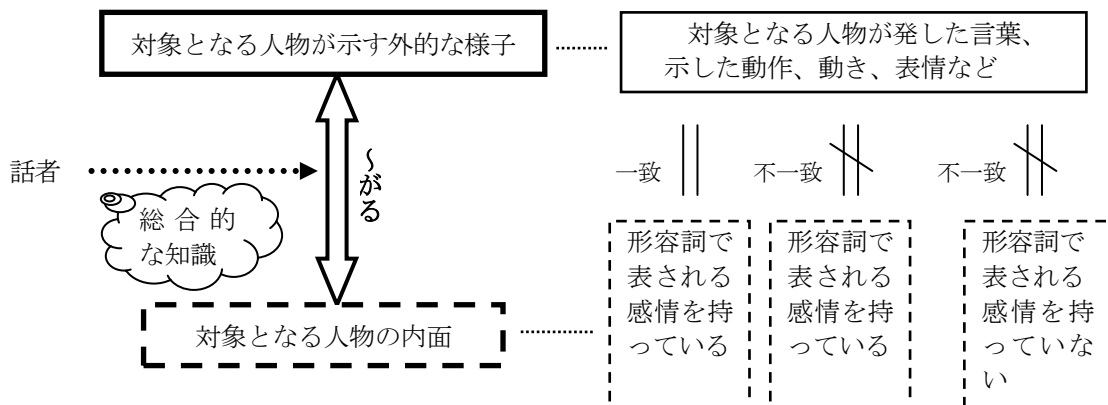


図1 「話者の捉え方」

これに基づく、先行研究での記述が十分でなかった (6) (7) のような、一人称での用法についても説明がつく。(6) (7) は、それぞれ発話時点での心の中の「もう一人の私」、何年後かの「もう一人の私」を客体化し、その「もう一人の私」が示している外的な様子を、総合的な知識に基づいてその内面と関係付け、それが、対象となる人物「もう一人の私」の「うらやましい」気持ちの表れであると捉えていることを表していると考えられる。

今後、「～がる」と類似性を持つと考えられる様態の「～そうだ」「～げ」との違いがどこにあるかについて考察を進めていくことを考えている。

参考文献

- 市川保子 (2005) 「感情・感覚形容詞、感情動詞」 日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店 p. 202
- 王安 (2005) 「接尾辞「～がる」の機能の再考」『北海道大学大学院文学研究科研究論集 (5)』北海道大学大学院文学研究科 pp. 241-261
- 黄其正 (2004) 「一がる」『現代日本語の接尾辞研究』溪水社 pp. 101-117
- 富田隆行 (1997) 『続・基礎表現 50 とその教え方』凡人社
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 森田富美子 (1988) 「接尾辞「～がる」について」『東海大学紀要 8』東海大学留学生教育センター pp. 1-15